

島市の兵器廠あたりに真つ黄色い大きな雲がモクモクと大きくなって上がっており、何か兵器廠で爆弾が破裂したのではと付近の兵隊と話し合っていました。

午前十時ごろ、広島市内に敵の特殊爆弾が落とされて街中が大変なことになっているので、ただちに出動せよ、との命令があり、われわれは小船に分乗して宇品港に向かい、午前十一時に到着しました。建物は全部破壊されており、その中をわれわれ小隊は広島市内の中心部に向かって前進しました。

その途中、破壊された家の中から小さな子どもの声で「兵隊さん！助けてちょうだい」と言っていたのが、今でも耳の底に残っているような感じがします。

午後零時四十分ごろ、小隊は目的

地に到着。それからが大変でした。

八月十三日まで、この地で野宿をしながら、まず八月六日は、街の中で重傷で苦しんでいる人を救出するのが第一の任務でした。あまりにも悲惨な状況でした。頭が割れてザクロのようになった人、双眼鏡のようによくさん救いを求めている人などが、たら救ってよいか分からないくらいでした。

街中の建物は全部というほど破壊され、一部では火災を起こし大火事になっていました。消火するにも、水もなければ、通る道路もないという惨状です。

まず、生きている人を優先して救出作業を進めました。付近の神社やお寺の広場、また、川の中、橋のたもとに大けがをした人が救いを求め

て集まっております、これが本当の生き地獄だと思いました。

人間は死の寸前でも、自分が死ぬと分かっている人も、他人より長く生きていたいと思うのでしょうか。全員が一斉に「自分の方を早く助けてくれ」と口々に叫んでおられた声が、今も耳元に残っています。

八月七日の朝は、真夏ではあるが午前三時半ごろからぼつぼつ明るくなりました。われわれも昨夜は救出作業のため一睡もせず、本当に目の回るような忙しさでした。その場で死んで行く人、救出されて担架で運ばれる人で入り乱れていました。死亡した人は、われわれが野宿している後ろに、ひとまず山のように積み重ねてありました。

街のあちこちでは、一命を取り止めた人が、丸裸に炭俵のような物を